

## 『医学部時代の友との別れ』

ひじり在宅クリニック 院長 岡本 拓也



たいていの医学生は、気の合う仲間と勉強会グループを作って医師国家試験の準備等を行います。

僕は、北大の医学生時代、3人のグループで毎日勉強会をしていました。僕以外の2人も、僕と同様に、医学部以外の学部を卒業し社会人を経て医学部に入学してきた人たちで、Mさんは僕より2歳上、I君は2歳下でした。医学部卒業後は、I君とは何度か会う機会がありましたが、Mさんとは年賀状のやり取りくらいでした。

医学部卒業後は循環器内科医として働いていたMさんに膵臓癌が見つかったとき、Mさんは54歳でした。

今から3年前の8月、一緒に勉強会をしていたもう一人の友人I君からの電話で、Mさんの病気のことを知りました。直ぐに、入院中のMさんの携帯に電話をかけました。

Mさんはこんな風に話してくれました。「膵臓癌が見つかった時、余命は半年、って言われたんだよね。それから何とか頑張って2年間も生きてきたんだから、まあいい方だと思うんだ。でも、もうできる治療はないみたいだね…。悔いはないんだ、ホントに。好きなように生きてきたからね。ただ、子どもたちが成人してくれていたらな、ってことは思うね…」

遅くに結婚したMさんには子どもが2人いて、上の子は高校生、下の子はまだ小学校2年生でした。

こんなことも言われました。「病気で患者になって、初めて分かったことがいっぱいあるんだよね…今なら、これまで以上にもっといい医者になれるんだけどなあ…それも悔しいっていうか、すごく残念なんだよね…」

その言葉を聞いて、僕はMさんとの一つの出来事を思い出しました。

「そう言えば医学生時代に日野原先生が札幌に講演に来られた時に、講演会の前の時間に、Mさんと僕と日野原先生と3人だけで話させてもらう機会をいただきましたよね。あの時に、日野原先生が仰ってましたよね。医者になる人間は、死なない程度の大病を経験した方がいいって…」話しながら、あと思ったのは、Mさんは、恐らく間もなく死に至る病の床にあるということ。「死

なない程度の」病ではないということ。「ああ、そんなことあったよね…」

というMさんの声は、少し寂し気に聞こえました。

電話で、小1時間、色々な話をしました。

会えるなら直ぐにでも会いに行きたかったのですが、コロナの関係で、面会はできないようでした。家族でも自由には会えないという辛い状況でした。

「また話がしたいね。いつ頃の時間帯なら電話は大丈夫？」とMさんに聞かれたので、「いつでも構いませんよ。僕はほら、一人で在宅医療をやってますから。24時間365日いつでも患者さんや家族から電話がかかってくるし、いつでも、それこそ深夜でも出勤してますから。いつでも連絡してもらって大丈夫ですよ。取り込み中なら後でかけなおしますから」と応えました。

するとMさんは突然嗚咽されて、涙で声を詰まらせながら、「やっぱり、岡本さんはいい医者やってるなあ…そうだろうなあとは思ってたけどさ…うん、わかった。なんか嬉しいなあ…今日はホントにいい日だった…本当にいい日だった…ありがとうね」と、Mさんは何度も「今日はいい日だった」を繰り返しました。

結局、Mさんは、退院も外泊もできないままに、その約1か月後の9月18日に亡くなりました。

私たちは、誰しものが、いつ終わりが来るかもしれない一度きりの人生を生きています。それは医療者として例外ではありません。Mさんがもっと患者さんのためにやりたかったであろう、良き医師としての仕事を、しっかり果たして行きたいと改めて思われます。

医療者として働けるということ…私たちが必要としてくれている患者さんやご家族のために働かせてもらえて、支えるお手伝いをさせていただける、喜んでもらえる、というのは、なんと有難い仕事をさせてもらっているんだろうな、と思います。

僕は、今年、2歳年上だったはずのMさんの歳を超えてしまいました。